

夜でも月や星が街を照らすはずだった。
しかしこの夜は雲ひとつないはずなのに、星の輝きが地上に届いてはいなかった。

異様な暗闇の空の下。
木々生い茂るとある公園の広場には小学生中学年くらいの見た目の少女がいた。
少女は白かった。
白い長髪、色白の肌。
指先からひじあたりまでを覆う白いグローブ。白いチューブトップで鎖骨やおへそが隠れておらず露出度が高い。
白いショーツの周りを半透明な絹状のベールが覆う。足を包むブーツまでもが白かった。
。

「出て。人形兵」

白い少女が静かな声を発すると暗闇の公園に光る魔法陣が現れそこから異形が湧き出てくる。
異形は大の大人ほどのおおきさの人型だった。ただしそれを形作る材質はコンクリート。
まるで人の型にコンクリートを流して固めたようだ。

「いって、人形兵」

白い少女が号令をする。
そこにまた静かな声が聞こえた。

「させませんよ」

光の筋が袈裟懸けに人形兵と呼ばれたコンクリート人形に走った。
次の瞬間、コンクリートの身体は筋に沿って切断され、支えを失った上体が地面に叩きつけられる。
残った下半身も後を追ひ、上下ともに粉になって消えていった。

「ルナ」

「そーです。装光妖精ルクスルナ、参上です」

登場して名乗りをあげた少女。
見た目は白い少女と変わらない年齢。
綺麗な黒い髪をポニーテールにして水色のかわいらしいシュシュでまとめている。
瞳は青い。感情の読めない表情は不思議な雰囲気を出していた。
黒地に黒襟、青のスカフタイを基調としたコスチュームにはところどころに水色の光を放つラインが光る。
胸当ての上部から見える首筋には忍者がしているような網状のインナースーツがのぞかせていた。
手先の手甲やその下の網のグローブ、足先の足袋なども忍者装束を思わせた。
腰には茶色の革のベルトが巻かれている。そこに括り付けられた鞘は彼女が手にもつ青い光で形成された刀状の剣、それを納めるためのものだった。
胸のあたりでは青いクリスタルがコスチュームに走る光のラインの終着点になり、青いスカーフを通して光り輝く。

彼女は装光妖精ルクスルナ。
“光”の力を駆使し、悪と戦う正義の戦士、ではある。

「夜勤はしんどいです。すぐ終わらせます」
「シェイと、遊んで？」
「嫌です」

自らをシェイと名乗った少女の誘いを即答で断り、二筋の青い剣閃を描くルクスルナ。
当然キャンバスは人形兵の身体だ。剣閃という線を刻まれたコンクリートキャンバスは
まっぶたつに割れて霧散し消えた。

「ルナのいけず。人形兵。集まって」

シェイの号令で、人形兵が一か所にあつまり、巨大な姿を形作る。
コンクリート人形の塊が小さなルクスルナを押しつぶさんとするため跳ねた。
しかし、もうその瞬間にはルクスルナの姿は地上にはなかった。
すでに人形塊の頭上をとっていたのだ。
ルクスルナの光剣は水色の光を集めて先ほどよりも輝いていた。

「はあああ！」

雄たけびとともに、縦一文字にひと際輝く光の軌跡。
それを受けた人形兵の塊は一気に散らばり、空中で霧散した。

「むっ」

ルクスルナが地上に着地するともうシェイの姿はなかった。
あまりそれを気にした様子もなく、ルクスルナは空を見上げた。
星々が徐々に現れて闇を照らし、最後に月が輝いた。

「私、月よりは団子が好きですね」

ルクスルナは誰に聞こえるでもなく呟いた。

「はあ」

望月優はため息をついた。
公園のベンチに座ってセーラー服のスカーフタイを整える彼女こそ、装光妖精ルクスル
ナの正体だ。
ある日、星無き夜空と異形——シェイはライフマテリアと名乗っていた——が現れるとと
もに託された“光”の力。
あまり優には正義感というものはなかったものの、自分が、友達が住む場所めっちゃく
ちやにされるのは困る。
他にやる人もいないなら自分がやるしかない戦いへと身を投じた。
優はまたため息をついて、その場を後にした。